

明かすファウジアさんと、娘のエレニーさん

=ハンダアチェ

(写真部・佐々木浩明撮影

民家の屋根に乗り上げた漁船について複雑な胸の内を

シムル島に伝わる叙事詩スモン

周りが静かになり地震が起こ りそうな気配です

りそうな気配です 村の人たちはパニックになり そうです

津波が来ることが心配なので

(中略)

(中略)

(中略)

(訳高藤洋子)

震災教訓の共有むすび塾@インドネシア (河北新報社と共催)

掲載日:2013 年 04 月 26 日

(C)河北新報社

むすび整@バ

ンダアチェ

化危 ŧ

塾」のメンバーは、バンダアチェ市内の災害遺構 道部】河北新報社の防災ワークショップ「むすび 【バンダアチェ(インドネシア) 高橋鉄男―報 行うファウジア・バシァリアさん 見学した。近所で水産加工販売を 乗ったまま保存されている住宅を

を訪ねた。いまもつらい記憶が消えない住民が、 複雑な思いを抱きながらも「津波の威力を知らな

い子や孫のために」と保存する姿に触れた。

(1面に関連記事

行は22日、漁船が屋根の上に

(43)の表情はさえない。

横を通る時は船から目をそらす。 る」。震災から80年たった今も、 し歩いたつらい記憶がよみがえ 体験や、行方不明のままの夫を探 「船を見ると、あの日の過酷な 漁船には住民59人が乗 言い聞かせるように話した。

(1) 地の ちと

8歳になった。夏には初孫も生ま れる。津波を知らない世代に伝え んだが、保存自体には反対してい つらい」。そう嘆くファウジアさ 「あのとき乳児だった娘も

ジアさんも生後5カ月の娘エレニ り込んで津波から逃れた。ファウ 波災害の「象徴」となった。 エ州が船と建物を取得保存し、 に飛び移った。被災後は市とアチ ーちゃんを抱えて自宅屋根から船 「写真を撮る観光客を見るのも 津

るものは残すべきだ」と、自分に 話を聞いて震災を伝える場所を ら、子や孫のためなら耐えられる。

賀城市の東北学院大3年渡辺英莉 山勝文さん(67)、大崎市の水難学 さん(20)も、ファウジアさんの言 加した東松島市の貝田行政区長中 会指導員安倍志摩子さん(51)、多 むすび塾」の語り部として参

> 電船は、行政が船ごと公園化し、 き内陸に打ち上げられた巨大な発

果も表れている。津波で海から5

遺構を保存した地域には経済効

7き流された安倍さんは「つら 自宅で津波に襲われ、鳴瀬川を 葉に耳を傾けた。 い思いをしたが、自分も母親だか 東日本大震災で東松島市野蒜の 市屈指の観光名所として土産物の 地元には行きすぎた「観光地化 売店や売り子が並ぶ。 最近、船に上る階段ができた。

ろう」と話した。 なくなった。100年以上残るだ した近所の男性(45)は「大津波の への危惧もある。ただ津波で被災 記録と収入の両面で地域に欠かせ

残した方がいいと思った」と話し

語 IJ 継 津波

むすび塾に同行した立教大アジア かった島がある。現地を調査し、 地域研究所の高藤洋子特任研究員 語で津波のこと)の言い伝えに従 もかかわらず、「スモン」(現地 って避難し、犠牲者がほとんどな に語り継ぐ意義を聞いた。 2004年のスマトラ沖地震の 、約10分の津波に見舞われたに ていた」 〇〇年間、シムル島だけに伝わっ ったのか。 なぜ災害の記憶は風化しなか

島では、人口約8万人のうち、ス マトラ沖地震の犠牲者は7人にと とまった。 震源から近いアチェ州シムル

、中間/ でも村の人たちはどこに避難 するかを既に分かっています タンゴ・パシにあるシバウ山 です 知

「日常生活に言い伝えが溶け込

2004年にインドネシアで津波 が起きました 多くの行方不明者が出ました 2011年に日本で津波がありま した。 多くの人がとても苦しみまし

では島民の99%以上の人が津波を 叙事詩ナンドンで口ずさみ、調査 叙事詩には「ヤシを

んでいた。住民は子守歌や地元の ときは、引き波で魚を拾いにいっ がれなかった。スマトラ沖地震の た住民らが犠牲になった」 悲惨な体験や教訓をどう語り

た ヤシを植えてみてごらんなさ い 将来、それは私たちの生活に 役立つに違いありません 神波で家が流されました 他の人々からの助けを待っ 他のハヘッ います タコノキ(マングローブ)の 後ろにヤシを植えます 将来、それを編むことになる 将来、それを編むことになる でしょう 神様にお祈りしましょう 将来、彼害に遭いませんよう

叙事詩に『201 一年に日本で津

たかふじ・ようこ 三重 県出身。同志社大卒。立教大 大学院博士前期課程修了。 父の仕事の関係で3歳から 中学3年までインドネシア で育つ。スマトラ沖地等を 機に任衆者をます。立教士 中学3年までイントインテ で育つ。スマトラ沖地震を 機に研究者を志す。立教大 アジア地域研究所研究員を 経て4月から現職。専門は 災害文化学。

立教大アジア地域研究所特任研究員 藤洋子氏に聞く

う言い伝え通りに避難した。約1 モンが来る。高台に逃げろ」とい 波の伝説が語り継がれ、住民は『ス 「1907年に島を襲った大津 それは私たちの生活に役立つに違 も盛り込まれていた」 いありません。など被災後の教訓 植えてみてごらんなさい。将来、 叙 事 ,詩に「備え」溶け込

継げばいいか。

け、地域に親しまれる踊り『マナ

被災後はニアス島民に呼び掛

も苦しみました」と追加された。

波がありました。多くの人がとて

村長は『歌で祈ることしかできな

いが、せめて語り継ぎたい』と話

という風潮があり、悲劇が語り継 は約120人が犠牲になった。 をすると、再び災いを呼び寄せる 対照的に、南隣のニアス島で 「ニアス島では地震や津波の話 だ。地域の民俗風習や伝統文化 エ』に津波防災の歌を組み込ん

本大震災の被害が付け加えられ 備えは長続きはしない」 込むようにして伝えなければ、 など、慣れ親しんだものに溶かし ーシムル島の叙事詩には、

震災後、島の一部で歌われる

AMI」という言葉が広がり、 切さをかみしめている

ド整備は限界がある。祖先の記憶 していた」 や知恵を語り継ぐことで備えの文 災教育にも力を入れている。ハー 化を醸成し、地域に定着させる大 「インドネシアにも TSUN 防方